

百人一首にみる川の歌

(財)リバーフロント整備センター 専務理事 砂川 孝志



単身赴任をしていた時、ふとしたきっかけで、百人一首でも憶えてみようということにした。最初は、いずれは競技カルタをと思ったがさすがに頭と体がついて行かなくてそれはあきらめた。しかし意図したわけではなかったが歌を憶えていくごとに、何か日本人の自然に対する情感が形作られているおおもとがここにあるのではと思い始め、記憶の対象という以上の興味が湧いてきた。

百人一首は勅撰和歌集からの選定という条件付きであり、またその選定に当たっては藤原定家の独特の思いが込められているという説もあって、この時代を真に代表しているものではないかもしれないがおおむねの雰囲気を表していることは間違いないだろう。

百人一首に歌われているのは季節、恋、旅・別れ、その他と大別されるが、それに紅葉、露、風、山、雲、月、そして川などの地物を織り込んで歌われる。

意外なのは太陽そのものや、星を歌った歌が一つもない。ものの哀れというこの時代に重要視された情感から見て、活動的なイメージがある太陽がないのは理解できるが、今にも消え入りそうなイメージの星が歌われていないのは不思議に思っている。多いのは月である。満ち欠けをする月、夜の闇を照らす月は、1000年前の人たちの想像力をかき立てたのであろうか。

さて川の歌だ。”川”が入っているのには次のような歌がある。

- 13番 筑波嶺のみねより落つるみなの川
恋ぞつもりて淵となりぬる
- 17番 ちはやぶる神代もきかず竜田川
からくれないに水くくるとは
- 27番 みかの原わきて流るるいづみ川
いつみきとてか恋しからむ
- 32番 山川に風のかけたるしがらみは
流れもあへぬ紅葉なりけり
- 64番 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに
あらはれわたる瀬々の網代木
- 69番 嵐吹く三室の山のもみぢ葉は
竜田の川の錦なりけり
- 77番 瀬をはやみ岩にせかる滝川の
われても末にあはむとぞ思ふ
- 98番 風そよぐならの小川の夕暮れは
みそぎぞ夏のしるしなりける

多くは季節や恋などを、”川”に託して表現されている。13番は”みねより”との韻を踏んでみなの川としたとも思われるし、27番もいつ見たのだろうか、会ってもいないのにという言葉の掛詞としていづみ

川（現在の木津川らしい）が使われている。69番も秋の風景の舞台として川が選ばれている。98番の歌も川で行われる禊ぎを、季節を象徴するものとして詠まれている。

しかし13番の歌も川が瀬となり淵と変化しながら流れる姿を思い描きながら詠んでいるようだし、98番のならの小川（京都上賀茂神社の境内に流れる川）も小さいながら、瀬や淵、滝を作りながら流れる清らかな流れをふまえたすがすがしさがベースとしてある。そして32番は紅葉が川に落ち風雅なしがらみとなっているという川という素材を生かした秋の美しい叙景歌である。64番も典型的な冬の叙景歌で墨絵のような美しさの川の姿を歌い、一種感動的でさえある。

川の穏やかな姿の歌が多いなか、77番では激しい川の流れを思い起こさせる。今はかなわぬ恋だけどいずれはまた一緒になろうという、強烈な意志を、早瀬が水しぶきをあげながら岩で二つに分かれても下流でまた合流する姿をかりて歌われている。その激しさは百人一首の中では珍しい。いずれにしろ、この時代の人は自然の川の姿をよく観察しそれを生かして歌にしている。

出水や洪水の歌は皆無である。当時も発生した地震や火事また飢饉と同様、洪水時はまさに生きるか死ぬかという瀬戸際の時であり、和歌の題材としてはこの時代の美的感覚とはそぐわないのかもしれない。あるいは、紀貫之の仮名序にあるように、むしろそうした悪霊的なものを和歌によって鎮めようと考えたとすれば穏やかな形の歌にならざるをえないのだろう。

また百人一首の世界では、方丈記に見られる”行く川の流れは絶えずして……”という無常観、時の変遷を表すものとしての川とはとらえられていないようだ。時代の変遷に感慨を持って歌った和歌も含まれているが、そこには川では表されていない。川はまだこの時代、はかなさというより美的表現の場としてとらえられている。

素材として多く使われているのは”山”であるが山には24番”このたびは幣もといあへず手向山紅葉の錦神のまにまに”に代表されるように”神聖なもの”という観念がある。これを別とすれば地物として川は数的にも月に次いで多い。川、水の流れはこの時代には自らの思いを託せる代表的な自然であった。そして現代においても川を見て詩情が湧き、郷愁を感じるのは、この時代からの感覚、心情がその後伝えられ、積み重ねられ、日本人の奥底の情感を形成してきたからなのだろう。